

私にも 言わせて! 第76回

鍛えて最強行政医を つくる



札幌市保健所医療担当部長
(平成27年度全国保健所長会
危機管理に関する委員会
副委員長)

山口 亮

昭和63年旭川医大卒。行政医一筋、28年間の北海道職員を退職し、平成28年札幌市豊平区保健福祉部長を経て29年より現職。口癖は「矢野医務監の命により」。保健所長歴16年の経験を生かし、矢野医務監の命により若手行政医育成に従事。職場では昼あんどんのような人といわれるが、北海道胆振東部地震の停電の際には役に立つことが証明された。尊敬する人は渡辺保健師(広島県)、小田保健師(同)、武智所長(群馬県)と剣所長(熊本県)。WHO勤務経験から自称「世界の山ちゃん」。

わが師、福山裕三・旭川医大名誉教授によれば、人生で大切なものは「健康、お金、生きがい」だそう(峰不二子さんは「ルパンとお金」)。3年前に齢52で転職したロータリ行政医が見つけた生きがいは、「若手行政医の育成」でした。獲得が難しいとされる公衆衛生医師の育成と期待の若手について、私にも言わせて!

はじめに

本タイトルは、競走馬のミノノブルボンを当時異端といわれた坂路調教で鍛えて、1992年の皐月賞と日本ダービーの優勝に導いた調教師、戸山為夫が病床で書いた『鍛えて最強馬をつくる』の題名を拝借しました。

札幌市保健所と市内の区役所(区保健センター)には現在、30代前半の若手行政医が3名います。彼らにスパルタ教育(競走馬でいう坂路調教)をして、最強行政医をつくろうと考えています。

なか検証できる機会がありませんでしたが、ついには訪れました。

検証

平成30年7月、厚生労働省は西日本豪雨のため、岡山県へのDHEAT派遣の要請を全国の都道府県と政令指定都市に行いました。札幌市は派遣準備が整っていると回答しましたが、岡山県への派遣は他県がすることになり、札幌市DHEATの派遣は見送られました。準備をしながら待機していると、その後、札幌市DHEATは広島県へ3班派遣することになりました。

第1班は入庁3年目の医師、第2班は入庁2年目の医師、第3班は私がりーダーとなって、平成30年7月17日〜8月4日まで広島県西部保健所呉支所、そして呉市保健所でDHEAT活動を行いました。

札幌市DHEATのモットーは「被災地にいることを忘れない、寄り添う、ねぎらう、何でもする」とし、その通り実践しました。チームメンバーは事務作業の空き時間に、呉市の施設の泥除け掃除をし、

方法

まず、疫学についてしっかりとした基礎を仕込むことにしました。毎週月曜日の午後1時から約3時間、疫学演習を1年間行いました。一番眠たいとされる月曜の午後には、部長席の前に若手医師を座らせて一方的に部長がしゃべり、若手医師に時々質問して答えさせているので、周囲はかなり心配していたようです。今流行中(?)のパワハラに見えていたのかもしれない。国立感染症研究所が毎年4月に1か月間かけて行う感染症実地疫学専門家養成コース(FETP

管理栄養士は土のう作りを手伝いました。DHEATチームリーダーは文字通り睡眠時間を削るような活動で呉市への支援計画とチームの管理を行い、札幌市保健所内には強力なバックアップチームをつくることで、札幌市DHEATは広島県および呉市に最大限の支援を行ったつもりです。

呉市保健所の301号室で同時に活動した日本赤十字の災害医療コーディネーターからは「札幌市DHEATの活動はモデルケースになると思う」とお褒めの言葉をいただきましたが、その評価は受援者の方々にお任せしたいと思います。

平成30年北海道胆振東部地震

広島県へのDHEAT派遣から戻って約1か月が経過した平成30年9月6日未明、北海道胆振東部地震(マグニチュード6.7、最大震度7)が発生し、北海道内では多くの人命が失われました。国内初とされるブラックアウト(北海道全域の停電)となり、余震はなかなか収まりませんでした。札幌市内でも液状化現象のため家屋が

=Field Epidemiology Training Program)の初期導入コースのプログラムを、演習部分を除いて約50回に分け、それを1年間で伝達しました。

プログラムの中には、他にも東日本大震災で経験した放射線測定法やその原理、2004年に東北・北陸で発生した原因不明の急性脳症の調査過程(フィールドにおける症例対象研究の実際)や結果と解釈、DHEAT(Disaster Health Emergency Assistance Team=災害時健康危機管理支援チーム)育成の経緯とその理論等、疫学調査や健康危機管理の理論と実地に基づくものを取り入れました。

また、結核集団感染におけるVNT R(Variable Number Tandem Repeats)の活用や全ゲノム検査の解釈という技術的な知識の習得と、行政医師にとって必要な市議会や予算の仕組みと原則、行政医傾いたり道路が波打ったりした地域もあれば、長引く停電のため自家発電装置のない医療機関では冷蔵庫内のワクチンや薬剤の退避という問題にも対処しなければなりません。

札幌市が管理する20の霊園では墓石などの倒壊やその恐れがあるものが約6200件となりました。発災から1週間がたっても札幌市保健所の各課は地震対応で大わらわでした。その中で札幌市の若手行政医が避難所訪問、医療機関との連絡調整等、大活躍していました。見るのは大変心強いものがありました。

おわりに

ここまで、ベテラン行政医が力を入れて若手医師を鍛えている経緯を報告しました。教材のレベルも教育レベルもまったく下げず、時には英語での講義をし、周囲から見るとおじさん医師が若手医師たちをいじめているように見えているような訓練ですが、一定の成果を上げていると思うところです。これからも若手行政医を育成するために、up to dateな話題提供と

としての考え方や振る舞いを盛り込みました。そして、行政医にとって必要と考えた古今の名著を読んでもらうことにしました。古くて使えない部分も多いですが、その精神性は今も生きています『議會答弁心得帖(篠崎俊夫著)、本当に楽しい『楽しい疫学(中村好一著)、実践に役立つ『医療職のための公衆衛生・社会医学(長谷川友紀著)、10年ぶりに改訂された『東京都感染症マニュアル』は必須図書になるくらい読み込んでもらいました。

異動により札幌市保健所の医療担当部長になってからは業務の都合もあり、疫学演習は月2回(原則、第2・第4木曜日の午後2時間)となってしまいました。若手医師との勉強は3年目に入りました。彼らの行政医としてのレベルが上昇しているかどうか、なか

行政医として喜びや生きがいを伝えていけたらと思っています。

むすびに、若手行政医達へ心の一句「迷わず行けよ 行けばわかるさ」

「期待の若手シリーズ 私にも言わせて!」は、
全国保健所長会ホームページに
バックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会 月刊公衆衛生情報

で検索してください

http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushueisei_watashi.html